

2025. 6. 8 (日) I コリント 15 : 35 ~ 44

15:35 しかし、「死者はどのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか」と言う人がいるでしょう。

15:36 愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ生かされません。

15:37 また、あなたが蒔くものは、後にできるからだではなく、麦であれ、そのほかの穀物であれ、ただの種粒です。

15:38 しかし神は、みこころのままに、それにからだを与え、それぞれの種にそれ自身のからだをお与えになります。

15:39 どんな肉も同じではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉、それぞれ違います。

15:40 また、天上のからだもあり、地上のからだもあり、天上のからだの輝きと地上のからだの輝きは異なり、

15:41 太陽の輝き、月の輝き、星の輝き、それぞれ違います。星と星の間でも輝きが違います。

15:42 死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、

15:43 卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蒔かれ、力あるものによみがえらされ、

15:44 血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。

<説教>

本日は今年のペンテコステ（聖霊降臨節）です。それで、聖霊の働きについて、私たちのからだの復活との関わりで聖書から学びたいと願います。

使徒パウロは I コリント 15 章で、私たちが信じるべき福音の中心であるイエス・キリストの死と復活について、その決定的重要性を語ります。コリントの教会の中に、〈死者の復活はないと言う人たち〉(12)がいました。それでパウロはキリストの復活が事実であること、そしてキリストの復活が私たちキリストにある〈死者の復活〉の根拠、希望であることを力説します(12-34)。

更にコリントの教会には〈「死者はどのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか」と言う人〉(35)がいたようです。「墓に葬られ、肉体が朽ちて形が無くなった死者のからだは復活するとは絶対に考えられない、信じられない」ということでしょう。「からだの復活」こそ「死者の復活はないと言う人たち」にとっての大きなつまづきでした。コリントを取り巻くギリシア思想（霊を重視し、肉体を軽視する）の影響もあったのでしょう。また、「キリストを信じたときに永遠のいのちを受けて『霊的に復活した』のだから、復活はもう起こった。それでもう充分である。死んだ後にからだも復活することなどあり得ない」という誤った教えがあったとも考えられています。

そんな〈愚かな人〉の間にパウロは答えます(36-38)。「あなたが蒔くもの」即ち〈種粒〉は土の中に蒔かれ、種の形を失い（つまり死んで）、後に初めて新しい形で地上に生きた姿を現します。〈種粒〉と人はこの点で似ているとパウロは言います。〈死ななければ生

かされません) (36)。つまり、「新しいのちと形」の前には「死」がある。そのように人も復活させられる前に一度〈死者〉とならなければなりません。また、その死んだ種粒から出た根、芽、茎、幹、枝、葉、花、実という〈後にできるからだ〉の生き生きとした美しい姿は初めの〈ただの種粒〉とは全然違います。そのように、今のこのやがて一度死んで土に帰って朽ちるからだ、その後の「復活のからだ」との間には非常に大きな違いがあります(37)。「復活のからだ」は、今の一度死ぬべきからだとは比べものにならない、キリストの〈栄光に輝くからだと同じ姿〉(ピリピ 3:21)のからだなのです。しかし各自の「見た目」がキリストと同じ容姿だということではありません。なぜなら、神が〈みこころのままに〉〈それぞれの種にそれ自身のからだをお与えにな〉っているからです。それぞれの種からその植物特有の姿〈からだ〉が生まれるのです。そのように、後の「復活のからだ」は、各人が今地上で生きているときに神から与えられている、その人のからだです。他人のからだを与えられるわけではありません。ですから後の「復活のからだは」今生きているからだと同じからだなのです(38)。

そのように「神が、みこころのままに、それぞれの種にそれ自身のからだをお与えになる」という植物の実例だけでなく、パウロは、〈人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉〉といった〈地上のからだ〉なる被造物、また〈太陽〉〈月〉〈星〉といった〈天上のからだ〉(文字通り「天体」)なる被造物の実例にも目を向けて答えます(39-41)。こうしてパウロは神の素晴らしい全能の力、神の善きみこころに目を向けさせるのです。神にとって、その全能の力で、みこころにしたがって死者を、それぞれの人のからだを、全く新しいのちと性質を持ったからだとして復活させることなど全く容易(たやす)いことだ、と続けてパウロは言うのです。

〈死者の復活もこれと同じです〉と言い、今のこの世にあるからだ、後の「復活のからだ」との性質の違いを挙げていきます(42-44)。〈朽ちる〉即ち「腐る」「滅びる」死ぬべきからだは〈朽ちない〉ものに復活させられます(42)。〈卑しい〉即ち恥ずべき罪ばかり犯しているからだは〈栄光あるもの〉即ち「神の栄光を現すからだ」「神の栄光のみを目指して行動するからだ」に復活させられます(43)。〈弱いもの〉即ち飢え、疲れ、痛み、苦しみ、衰えて行くからだ、殊に神をあがめ神のみこころを行うことにおいて怠惰で、臆病で、始めたとしてもすぐに疲れてやめてしまう、限界あるそんな〈弱い〉からだは、もはや疲れることなく限界なく神を賛美し、神に仕え従う、そんな〈力ある〉からだに復活させられます(43)。そして〈血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです〉(44)。

このように〈朽ちない〉〈栄光ある〉〈力ある〉「復活のからだ」は何と言っても〈御霊のからだ〉です(「御霊に属する」と訳されている言葉も直訳は欄外注の通り「御霊の」です)。一方、〈血肉のからだ〉が今のこの地上で生きているからだです。くどいようですが、死者の復活は〈からだ〉を伴った復活です。ですから、「今のこの代のからだは『肉体』だが、復活のからだは『霊体』である」との言い方、表現は、非常に誤解を招きかねない言い方です。〈血肉の〉も〈御霊の〉も、どちらも同じ〈からだ〉、肉体なです。見て、さわって、感触を得られる、それぞれに神から与えられた〈からだ〉です。そうでありながら、〈血肉のからだ〉と、復活させられた〈御霊のからだ〉ではその性質が、その栄光が決定的に違うのです。その違いをもたらしてくださるのが聖霊の働きなのです。〈血

肉の)と訳された語は「生まれながらの」とも訳せませす(欄外注)。そして名詞形では「たましい」「いのち」「心」「人」等と他の箇所では訳されています。つまり〈血肉の)とは「生まれながらのたましいの、心の、人の」ということです。ですから〈血肉のからだ)とは、「生まれながらのたましいに、心に、人になおも従うように非常に強く傾いているからだ」ということです。一方、〈御霊のからだ)とは、「御霊によって完全に統制され、支配されているからだ」ということです。もちろん、イエスを主と告白し、信じている私たちには既に聖霊が与えられ、内に宿っておられ、聖霊の働き、導きの中にいます。既にキリストにある新しい人として生まれ変わらせて頂いています。「しかし同時に、私たちには「生まれながらの」、罪の性質がなお根深く残っています。ですから私たちはからだをもって「新しい人」として完全に生き抜くことができません。神を愛し、隣人を愛し、神のみこころに従って思い、語り、行動したいと願いつつ、その一方で、神より自分を愛し、自分の心の思いを押し通し、隣人を愛さず、思いと言葉と行いにおいて神を怒らせ悲しませ続けています。そのように、私たちのからだは「生まれながらのたましい、心」に相当引きずられています。それが今この地上で〈血肉のからだ)で生きている私たちの実状です。しかし、やがてキリストの再臨のとき〈御霊のからだ)をもって復活させられれば、その後は、聖霊が完全に、永遠に私たちのたましいとからだを支配し、統制してください。聖霊はそのように私たちに働いてくださるのです。それで私たちは復活のからだをもって聖霊と同じことを思い、語り、生きるのです。それが「キリストの栄光に輝くからだと同じ姿」というものです。即ち神を賛美し、神の栄光を現すためだけに生きるのです。「死者は御霊のからだで来る」、これが先の〈愚かな人)の問への答えです。